

## V. 西陣地域住民の地域生活意識と近隣関係

### — 柏野学区の場合 —

#### はじめに…課題の限定

われわれは西陣地域の近隣関係について既に2つの報告をしてきた。1つは西陣学区の世帯主を対象にした分析結果（「西陣地域住民のくらしと意識の調査報告」）であり、他は西陣地域の13学区の個人を対象にした調査報告（『伝統産業と地域社会構造—京都・西陣地域の事例』）である。そこにおいてわれわれは、いわゆる「西陣的なもの」（その構成要因として、①西陣織の産地という経済的要因、②都市居住空間の形態的要因、③地域住民形成史という社会的要因の3つを想定した。）が、どのように近隣関係に影響しているかを捉えようとしてきた。

小論での課題は、第一に地域比較である。柏野学区の世帯主を対象にした調査データ（第3次調査）を、西陣学区の近隣関係と比較することで、次の問題に接近しようとしている。その1つは地域における両学区の西陣織関係者の多寡の差、つまり西陣織の産地という経済的要因がどの程度近隣関係に影響を与えているかの分析であり、また西陣織関係者内部の織元、賃機という階層差と近隣関係とのかかわりについて

の分析である。2つは居住空間の形態差が近隣関係にもたらす影響の把握であり、そして3つは居住期間など地域住民の形成史の相違と近隣関係との関連性の分析である。

第二は、これまでのわれわれの近隣関係分析でとりあげてこなかった地域生活価値や規範と近隣関係との関連性についての分析である。個々人がどのような地域生活を営もうとしているかという生活価値は、個人レベルでの近隣関係のあり方に大きな影響を与えていることであろう。また生活価値は集合的に社会的規範として、地域の慣習や町規、町内会の規約などさまざまな形態をとり、現実の諸個人の近隣関係をコントロールしていると思われる。ここではいくつもの地域生活価値の指標をてがかりに、その差異が近隣関係にどのように影響しているかを明らかにしようとした。

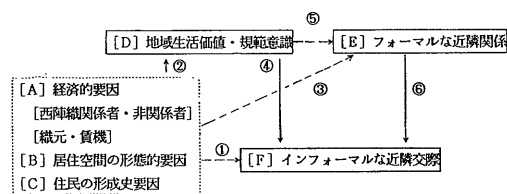
この場合、われわれはR・P・ドーアにならって、近隣関係をフォーマルなものインフォーマルなものの二重の関係として捉えらることにする。小稿では特に後者のインフォーマルな近隣交際にしぼって分析を進めることにする。

#### 1. インフォーマルな近隣交際の分析枠組

以上の課題に接近するために、図V-1のような分析枠組を設定した。〔F〕インフォーマルな近隣交際に影響を与えるものとして、〔A〕経済的要因、〔B〕都市生活空間の形態的要因、〔C〕住民の形成史などの社会的要因、〔D〕地域生活価値・規範意識、〔E〕フォーマルな近隣関係の5つの要因群が考えられる。5つの要因群は相互に関連しあっているが、ここではその相互関係のすべてについて分析するのではな

く、A、B、Cの3つの要因群の〔D〕、〔E〕および〔F〕に対する規定性と、〔D〕地域生活意識要因と〔F〕インフォーマルな近隣交際の

図V-1 近隣交際の枠組



関連性について分析することにする。

上の関連図式にかかわって柏野学区の世帯主を対象にした第3次調査の諸項目を、主題の〔F〕インフォーマルな近隣交際との関係で整理してみることにする。まず、〔F〕のインフォーマルな近隣交際についての指標としてどのようなものがあるか。これについては、Q17(近隣交際の種類と軒数)、Q15(親交関係のうちの近隣)、Q16(贈答関係のうちの近隣)、Q18(援助関係のうちの近隣)などの諸項目があげられるだろう。これらのインフォーマルな近隣交際の諸指標は、それぞれ近隣交際をある側面から把握したものである。近隣交際の広がりや深まりの程度をこれらからうかがうことができる。

次に、〔A〕経済的要因に関する諸指標としては、Q28(世帯所得)と別表1の世帯主の属性(職業、従業上の地位、従業者規模、西陣織との関連)などがある。これらの中でも「西陣らしさ」のいわば中核をなす西陣織関係者と非関係者、およびその内部での織元・賃機の関係に限定して分析を進めることにする。〔B〕居住空間の形態的要因に関する調査項目ということでは、Q25(住宅所有形態)とQ26(住居の広さ：畳数)、Q27(通勤の有無)などがある。これらは表、通、図子、露地の入りくんだ街路、町家と長屋の混在といった西陣地域の生活空間の特徴を直接的に表示する指標ではかならずしもない。住宅所有形態と居住空間の広さ、通勤(職住一体と職住分離)などから、おおまかに

その地域と世帯の居住空間の状況を推し量り、そうした形態的な要因が近隣交際のあり方にどのような影響を及ぼしているかを見ようとするのである。

〔C〕の住民の形成史の指標については、Q1(居住期間)、Q2(出生地、最長居住地、前住地)、Q7(生活環境問題への解決行動の有無)、Q13(地域組織・団体の役員経験)などがある。これらの指標は、個々の住民がその地域社会の中でどのような経験を積み、また地域の関係性の網の目の中に組み込まれてきているかを示す個人の地域史であるとともに、地域社会の形成史をも表している。〔D〕地域生活価値・規範意識に関する諸指標としては、Q5(よそ者基準)、Q7(生活環境問題の認識)、Q8(生活環境問題の解決方法)、Q9(生活環境問題への実践)、Q10(定住意識)、Q11(地域生活への規範意識)、Q12(西陣の将来像)などがある。

〔E〕フォーマルな近隣関係についての指標としては、Q13(地域団体への加入状況)とQ14(町内会への参加度)があげられる。このフォーマルな近隣関係については、谷口報告が地域集団の分析としてとりあげるので、小論では〔F〕インフォーマルな近隣交際に直接かわるかぎりにおいて言及することにする。

このように、ここでの分析は主として第3次調査のデータによるが、あわせて地域比較や補強のために第1次調査(西陣学区の世帯主)および第4次調査(西陣地域13学区の個人調査)をも使用する。

## 2. 近隣関係の地域差の実態

### (1) 柏野学区の「西陣度」

柏野学区の地域概要については、若林報告などでふれられているので繰り返さないが、その「西陣らしさ」の特徴を、第4次調査の西陣織関係者の地域分布などからみることにする。特に、これから比較しようとする柏野学区と西陣学区とは西陣地域全体の中でどのような特性をもった地域として位置づけられるかを把握することにしよう。第4次調査は本人、家族および親戚が西陣織に関係しているか、否かを問うて

いるが、それによると西陣織関係者の地域分布は表V-1のようになっている。

これは西陣織との社会的距離を示している。柏野学区における西陣織関係者の集積度は極めて高い。すなわち、本人については関係者比率が43.4%と調査学区中最も高く、また家族内での従事者比率も49.5%と成逸学区に次いで2番目に多くなっている。さらに親戚の西陣関係者比率は55.1%と、これも成逸学区の58.7%に次いで2番目に高くなっている。この本人以外の

表V-1 学区別西陣織関係者

|    |   | (本人) | (家族) | (親戚) |
|----|---|------|------|------|
| 柏野 | 野 | 43.4 | 49.5 | 55.1 |
| 紫  | 野 | 25.2 | 30.8 | 46.2 |
| *成 | 逸 | 36.2 | 51.1 | 58.7 |
| *西 | 陣 | 24.4 | 36.4 | 44.4 |
| *乾 | 隆 | 34.5 | 39.7 | 39.3 |
| 翊  | 鸞 | 33.7 | 47.4 | 48.4 |
| *嘉 | 楽 | 22.9 | 31.4 | 45.7 |
| *桃 | 園 | 31.9 | 34.0 | 34.1 |
| 正  | 親 | 18.8 | 27.7 | 33.3 |
| 聚  | 楽 | 24.4 | 27.5 | 42.5 |
| 仁  | 和 | 13.1 | 17.0 | 31.8 |
| 出  | 水 | 10.1 | 14.7 | 30.7 |
| 待  | 賢 | 6.5  | 3.5  | 24.6 |

\*印は歴史的に西陣織を営んでいた地区

関係者比率の高さは、学区内のほとんどすべての人々が身内に西陣織関係者をかかえていると見てよいだろう。

これに対して、西陣学区は歴史的に西陣織を営んできた、いわゆる「ほんまの西陣」と呼ばれる地域にあるが、西陣織関係者の密度は本人で24.4%、家族36.4%、親戚44.4%と、柏野学区に比べるとかなり低くなっている。特に、本人の関係者比率は20ポイントも低い。とはいえ、織元が多いこともあって1事業所当たりの従業者規模は大きく、住民の中での影響力はその実数以上に大きなものがあると思われる。そして、ここでも家族、親戚まで含めると、住民の多数は西陣織と関係して生活を営んでい

る。

表V-2は第2次調査（西陣学区・個人対象）および第5次調査（柏野学区・個人対象）の西陣織関係者の内的構成である。柏野学区の特徴は西陣織関係者の比率が高いだけでなく、その中でも製織関係者、とりわけ賃機層がきわだっただけである。資本金がいらす、デザインなどのソフト力や流通機能も必要とせず、ただ出来高払いの加工賃のみが問題となる賃機は、就業の安定性や労働内容、生活時間などに固有の特徴を刻印する。一言でいえば“多忙さ”に収斂される賃機層の多さは地域の社会関係に影響を与えることになる。

## (2) 近隣交際の地域差

では柏野学区と西陣学区の近隣交際の実態がどのようになっているかについて、世帯主を対象にした第1次、第3次調査結果によって見ることにしよう。表V-3-1～表V-3-4は近隣交際の内容ごとの交際軒数の比較である。これらから次のことがわかる。第一に、4種類の近隣交際の内容は親密さの程度をも表示しているということである。すなわち、挨拶は最もポピュラーな近所づきあいで8割以上の者が行っているが、留守中のことを頼むは5～6割台に低下し、お茶に呼ぶなどの日常的な相互訪問はさらに3～4割に下降している。そして金銭の援助は最も低く7～9%になっている。

①道であえば挨拶する程度の近隣交際は相互に認知していることの確認の行為に近く、した

表V-2 西陣織工程別従業者

|     | 関係計<br>関者 | 織元   | 賃機   | 内機  | 企画<br>製紋 | 原料  | 機準<br>機備 | 整理<br>準備 | 問屋  | 工不<br>明程 | 関係<br>なし | N     |
|-----|-----------|------|------|-----|----------|-----|----------|----------|-----|----------|----------|-------|
| 柏 野 | 335       | 41   | 163  | 24  | 6        | 24  | 7        | 5        | 9   | 56       | 373      | 769   |
|     | 43.6      | 5.3  | 21.2 | 3.1 | 0.8      | 3.1 | 0.9      | 0.7      | 1.2 | 7.3      | 48.5     | 100.0 |
| 西 陣 | 287       | 96   | 32   | 7   | 26       | 40  | 8        | 14       | 53  | 2        | 458      | 769   |
|     | 37.3      | 12.5 | 4.2  | 0.9 | 3.4      | 5.2 | 1.0      | 1.8      | 6.9 | 0.3      | 59.6     | 100.0 |

表V-3-1 ①道で会えば挨拶する軒数

( )は交際比率

|    | 1～5  | 6～10 | 11～20 | 21～30 | 31軒以上 | N          |
|----|------|------|-------|-------|-------|------------|
| 柏野 | 10.5 | 24.4 | 19.5  | 8.2   | 37.4  | 770 (83.7) |
| 西陣 | 10.4 | 21.7 | 20.4  | 11.4  | 36.1  | 613 (82.9) |

表V-3-2 ②留守中のことなど頼みあう軒数

|    | 1～5  | 6～10 | 11軒以上 | N          |
|----|------|------|-------|------------|
| 柏野 | 96.2 | 1.4  | 2.4   | 394 (63.3) |
| 西陣 | 97.0 | 0.8  | 2.3   | 582 (53.3) |

表V-3-3 ③お茶に呼んだり、呼ばれたりする軒数

|     | 1～5  | 6～10 | 11軒以上 | N          |
|-----|------|------|-------|------------|
| 柏 野 | 87.0 | 8.7  | 4.2   | 416 (45.2) |
| 西 陣 | 84.9 | 10.9 | 4.3   | 282 (38.4) |

表V-3-4 ④お金を用立てたりする軒数

|     | 1～5  | 6～10 | 11軒以上 | N        |
|-----|------|------|-------|----------|
| 柏 野 | 89.4 | 3.5  | 7.1   | 85 (9.2) |
| 西 陣 | 92.6 | 3.7  | 3.7   | 54 (7.3) |

がって広域で行われる。31軒以上が36～37%もあるのはそのことを示している。②留守中のことを頼みあうは都市社会では荷物を預かるなどという場合が大半であろう。これは利便型交際ともいえるもので、この程度のつきあいではさして親しくなくても行われる。とはいえ、この形態のつきあいは向三軒両隣のごく近い範囲に限られる。交際軒数1～5が96～97%を占めているのはそのためである。

これに対して、③お茶に呼んだり、呼ばれたりという日常的な相互訪問は、都市の住宅事情やプライバシー問題ともかかわって、かなり親密度の進んだ交際形態といえるだろう。そのため交際相手は広域化することになる。しかし、金銭の援助にまで近隣交際が進展することはめったにない。日常的に顔を合わせなければならぬ人々との間での金銭的なトラブルを避けようとするからである。だからこの交際形態は絶対的に少ないだけでなく、ここまで進んだ場合でもその軒数はごく限られる。

第二に、近隣交際の地域比較については柏野学区の住民がより親密なつきあいをしている。交際比率の高い①挨拶と最も低い④金銭援助については地域差がみられない。地域差があるのは②留守中の依頼と③日常的な相互訪問であり、②については10ポイント、③については6.8ポイントも柏野学区の比率が高くなっている。近隣交際における両地区の親密度の差がどのようなものであるか、他の3つの近隣指標によってさらに踏み込んで確かめてみることにしよう。

その1つはお中元やお歳暮などの儀礼的な贈

答品の交換（物の交換）であるが、これはかなりフォーマルな色彩の濃い交際形態であると思われる。こうした贈り物の交換をしている者の比率は柏野学区74%、西陣学区76%でほぼ同じ程度の数値になっており、うち近所の人々と交換している者の比率も22～23%で両学区はほとんど差がない。物の交換については、個人を対象にした第4次調査（13学区調査）の日用品等の貸借と“おすそわけ”に関するデータがある。表V-4のように、個人レベルのインフォーマルなつきあいの性質をもった物の交換でも、日用品等の交換と“おすそわけ”とでは実施率はかなり異なっている。物が豊富に出回り、またレンタルが商売になるような今の世相では物の貸借という行為は成立しにくくなっている。だからこのような関係性は、今日では親密度の指標であるよりは、むしろ貧困の指標としての意味をよりもっていると考えられる。したがって、日用品等の貸借比率の高い上位4学区（正親、仁和、柏野、出水）と世帯年収400万円未満層の比率の高い学区（仁和、柏野、翔鸞、正親）はおおむね重なってくることになる。

表V-4 近隣交際の内容①

|     | 日用品等の貸借 | おすそわけ |
|-----|---------|-------|
| 柏 野 | 17.6    | 56.8  |
| 西 陣 | 11.4    | 63.6  |

“おすそわけ”という行為は、たしかに物を介した関係ではあるが、そこでの物そのものの占める位置はきわめて小さい。それは相手に対する好意とか感謝とか親密さなど、ある種の感情の日常的な表現であろう。だから他の表現形態をとることができれば、必ずしも物を介したこの“おすそわけ”という形をとらないかもしれない。しかし、物そのものの価値は低くても物の交換であることに変わりはないから、経済的条件は何等かの形で投影することになる。柏野学区の場合、“おすそわけ”比率が平均以下となっているが、それは西陣学区に比べて20歳代、単身者、低所得者などの割合が高いことと関連しているものと考えられる。

2つ目に、情報や労力の提供などさまざまな

互助的な近隣交際（サービスの交換）をとりあげてみよう。ここでは3種類の生活課題と生活事故について近隣者が援助者としてどのような位置にあるかをみる。（表V-5）まず進学・就職・結婚についての相談、援助であるが、柏野学区は生活問題への遭遇率（困難にであった比率）が若干高く、またその場合の近隣者への依存度も高くなっている。それは零細な賃機が多いことからくる生活の不安定性、相対的低所得という経済的条件の厳しさが関係していると思われる。しかし柏野の特徴は近隣者以外にも全体的に援助の人的ネットがきわめて厚いことである。

表V-5 頼りになった人に近所の人をあげた比率

|     | 進学・就職・結婚問題 | 病気・事故・失業 | 金銭上の問題 |
|-----|------------|----------|--------|
| 柏 野 | 22.7       | 32.3     | 6.8    |
| 西 陣 | 9.8        | 23.4     | 4.0    |

第4次の個人調査データによる柏野の互助的な近隣交際は、世帯主の近隣交際像と同様に頻繁なサービスの交換を示している。子供、老人、病気時の世話のいずれも柏野学区の方の比率が高くなっている。また留守番や買物の手伝いなどではさらに一層柏野の割合が高い。日常的なこまやかな近隣交際が営まれていることを物語っている。そのためほとんど交際しないという孤立層の比率も西陣学区よりは低くなっている。

表V-6 近隣交際の内容②

|    | 子供の世話 | 老人の世話 | 病気の世話 | 留守番  | 引手越のい | 心の配相事 | 買物の手伝い | は交際とんなどし |
|----|-------|-------|-------|------|-------|-------|--------|----------|
| 柏野 | 16.2  | 6.8   | 8.1   | 12.2 | 4.1   | 12.2  | 13.5   | 18.9     |
| 西陣 | 13.6  | 2.3   | 6.8   | 4.5  | —     | 13.6  | 2.3    | 22.7     |

とはいえこうした互助的な近隣関係が、そのまますぐに急迫的な生活課題に対応できるというものでもない。表V-7のように、急病などで世話を頼める人がいない者はむしろ柏野の方が多くなっており、頼める人との関係も血縁関係のウエイトが高くなっている。緊急の際の近隣ネットの弱さは、“おすそわけ”比率の低さに

表V-7 急病の世話を頼める人の有無・関係

|    | 急病の世話人・あり | 家族・親戚 | 近所の人 | その他  |
|----|-----------|-------|------|------|
| 柏野 | 85.1      | 77.8  | 4.8  | 17.5 |
| 西陣 | 91.1      | 65.9  | 14.6 | 19.5 |

についての箇所で指摘したように、柏野に若年、単身、低所得層が多いこと、そして彼らが地域の中に独立した世帯としてちゃんとした位置を確保できていないこと示しているように思える。

そして3つ目の指標として親交関係（感情の交換）と近隣交際との関連をみてみよう。日ごろ親しく交際している人（3人までに限定）の関係性と那些人々の居住地域は表V-8のようになっている。まず、柏野学区の親交圏が若干狭くなっていることがわかる。親交者の居住地のうち近所と学区をあわせれば54.4%と西陣学区よりも10ポイントも上回っている。そのことは当然、親交者の関係にも投影する。親交者の中で、近所の人と同業者の比率が西陣学区よりも高くなっているのである。つまり、西陣織業者密度の高い柏野学区内での親交者が多くなれば、近所の人か、業者かということになる。

表V-8-1 親 交 関 係

|     | 親類   | 同窓   | 近隣   | 同僚  | 同業   | その他 | N    |
|-----|------|------|------|-----|------|-----|------|
| 柏 野 | 21.8 | 8.9  | 39.2 | 7.0 | 13.8 | 9.2 | 2103 |
| 西 陣 | 25.0 | 14.0 | 33.3 | 8.3 | 11.4 | 8.0 | 1744 |

表V-8-2 親 交 圏

|     | 近所   | 学区   | 北・上  | 京都市内 | 京都府 | 近畿その他 | N    |
|-----|------|------|------|------|-----|-------|------|
| 柏 野 | 26.1 | 28.3 | 26.6 | 14.1 | 2.8 | 2.0   | 2103 |
| 西 陣 | 23.8 | 20.4 | 27.0 | 19.0 | 4.0 | 5.7   | 1744 |

このように柏野学区では狭い範囲で親密さの交換がなされている。それは一つには柏野学区の住民の社会的・経済的な条件の等質性と関係しているように思える。西陣織業者、それも実質的には出来高払の労働者である賃機業者が地域の多数派であり、そのために共通の利害、共通の感情が形成され易い。二つにはプライバシー仮説とでもいうべきものが柏野学区の近隣

交際とかかわっていると考えられる。すなわち、プライバシーが侵害されるような地域居住空間の低位性によって、このような高い親密度が作られているのではないかということである。

西陣地域は全体的にも狭い街路が入り込んで閉鎖的な地域空間を構成しているが、西陣学区と比較した場合、狭隘な街路に長屋式住宅が軒を並べている柏野学区の住環境は一層厳しくなっている。このことは地域生活環境に対する住民のニーズとして、「緑が少ない」、「家が建てこんで日当たりが悪い」、「道路が悪い」などが柏野学区で特に高い数値を示していることからわかる。とすると、柏野学区の親密な近隣交際はこのプライバシー仮説で説明できるようなにも思えるが、この点については後でもう少し踏み込んで検討することにする。

以上は西陣地域の2地点における近隣関係のインフォーマルな領域の比較である。同じ西陣組織の産地であっても、その近隣交際の仕方はかなり異なっていることがわかった。ところで、インフォーマルな交際のあり方、程度には、その地域のフォーマルな近隣関係のあり方が影響するであろう。そこで両学区のフォーマルな近隣関係の状況を瞥見しておくことにする。

表V-9-1～V-9-3が示していることは次のことである。西陣学区の世帯主の方がフォーマルな地域団体への加入率が高いこと、町内会への参加状況は2つの地区とも全く同じであること、個人を対象にした近隣交際の項目のうち冠婚葬祭のような比較的フォーマルな性質をもっているもの（交際の仕方が明示的、黙示的にきめられていることが多い）についてもあまり大きな差がないこと、などである。

これらからすると、フォーマルな地域団体への参加がそのままインフォーマルな近隣交際を促進させることにはならないこと、またフォーマルな領域での近隣関係については、とりわけ世帯主の場合には地域差が少ないことがわかる。地区内でのフォーマルな近隣関係へのかか

表V-9-1 地域組織・団体への加入（世帯主）

|    | 町内会  | 商店会 | 婦人会  | P<br>T<br>A | 青年団 | 老人会  | 業者会  | 防犯   | 氏子会 |
|----|------|-----|------|-------------|-----|------|------|------|-----|
| 柏野 | 79.9 | 0.9 | 18.9 | 18.1        | 1.5 | 13.0 | 21.4 | 6.8  | 6.3 |
| 西陣 | 77.9 | 3.4 | 28.1 | 31.4        | 3.7 | 16.8 | 26.9 | 12.2 | 4.5 |

表V-9-2 町内会への参加度（世帯主）

|    | 積極的<br>参加中<br>中心的役<br>割 | 会合・行<br>事ごと<br>に参<br>加 | よ<br>く<br>参<br>加 | たまた<br>ま参加<br>程度 | 参加せ<br>ず関心<br>なし | NA  |
|----|-------------------------|------------------------|------------------|------------------|------------------|-----|
| 柏野 | 6.0                     | 22.1                   | 24.0             | 21.1             | 19.5             | 7.4 |
| 西陣 | 7.4                     | 21.8                   | 24.8             | 20.0             | 19.3             | 6.8 |

表V-9-3 冠婚葬祭などの世話（個人）

|    | 冠婚葬祭の手伝い | 近所の掃除 |
|----|----------|-------|
| 柏野 | 37.8     | 14.9  |
| 西陣 | 40.9     | 20.5  |

わり方には格差を生じさせているのに、地区間ではほとんど差がないのは何故だろうか。一つの仮説としては、フォーマルなものへのかわり方についてのルールが、西陣地域というような範域ではほぼ似たような運営のされ方になっているために地域差が生じにくいのではないかと考えられる。

例えば、町役職に就いて町内会の中心メンバーとして積極的に活動する必要のある人数は一定決まっており、役職の重要度によって仕事の繁忙に格差がある。2割程度のフォーマルな近隣関係を避けている層を除けば、たまに参加する程度の人であっても、それは現在たまたま役職の時期にないためにフォーマルな近隣関係に深くコミットすることが求められていないだけで、その時期になれば積極的に活動し始めるであろう。したがって、地区内での町内会活動の参加度の差は、もともと共同の仕事の処理が住民の間に格差をもって分配されていることの反映という側面をもっているように思われる。

### 3. 近隣交際の規定要因

このように西陣地域の近隣関係はフォーマルなつきあいの面では学区間に格差が少なく、インフォーマルな近隣交際において地域差が顕著に現れている。そこでインフォーマルな近隣交際が活発に行われている柏野学区のデータ（世帯主）によって、近隣交際を規定している要因をさぐってみることにする。

#### (1) 経済的関係と近隣交際

ここでは西陣関係者であること、および従業上の地位との関連で近隣交際をみてみよう。まず西陣織関係者と非関係者の間での近隣交際については、その差はそれほど顕著に現れていない。表V-10-1～表V-10-4に示されているように近隣交際のどの形態についても関係者と非関係者の差はほとんどない。これは西陣織に関

表V-10-1 ①道で会えば挨拶する軒数

|         | 1～5 | 6～10 | 11～15 | 16～20 | 21軒以上 | NA  | 交際有計 | N   |
|---------|-----|------|-------|-------|-------|-----|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 8.0 | 21.2 | 4.2   | 11.6  | 38.6  | 0.9 | 84.6 | 448 |
| 非西陣織関係者 | 9.2 | 19.7 | 4.8   | 11.8  | 39.8  | 0.6 | 86.0 | 270 |

表V-10-2 ②留守中のことなど頼みあう軒数

|         | 1～2  | 3～5  | 6～10 | 11軒以上 | NA  | 交際有計 | N   |
|---------|------|------|------|-------|-----|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 40.6 | 20.1 | 0.9  | 1.1   | 0.7 | 63.4 | 448 |
| 非西陣織関係者 | 43.3 | 29.1 | 1.0  | 1.6   | 0.6 | 65.6 | 314 |

表V-10-3 ③お茶に呼んだり、呼ばれたりする軒数

|         | 1～2  | 3～5  | 6～10 | 11軒以上 | NA  | 交際有計 | N   |
|---------|------|------|------|-------|-----|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 20.8 | 21.4 | 4.7  | 1.6   | 0.4 | 48.9 | 448 |
| 非西陣織関係者 | 20.1 | 19.7 | 3.8  | 2.2   | 0.6 | 46.5 | 314 |

表V-10-4 ④お金を用立てたりする軒数

|         | 1～2 | 3～5 | 6～10 | 11軒以上 | NA  | 交際有計 | N   |
|---------|-----|-----|------|-------|-----|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 7.4 | 1.1 | 0.2  | 0.2   | 0.4 | 9.4  | 448 |
| 非西陣織関係者 | 6.4 | 1.6 | 0.3  | 1.3   | 0.6 | 10.2 | 314 |

係しているか否かが、近隣交際のあり方に全く影響していないことを示しているのではなく、むしろ逆に地域の調査世帯の約6割にも及ぶ、西陣織関係者比率の高さが非関係者の近隣交際に影響して、その差を少なくしていると考えたほうがよい。

西陣織への関係性と近隣交際との関連性を、もう少し他の指標で追求してみよう。近所とお中元などをやりとりしている人数では、表V-11のように西陣織関係者が若干多い程度である。また、生活問題で頼りになった人として近所の人をあげている割合は、これも病気・事故・失業等で西陣織関係者が少し高くなっている程度である。(表V-12)このように儀礼的な物の交換や互助の関係で西陣織関係者の近隣交際が多少の親密さをうかがわせる程度で、その差は大きくない。むしろ親しさからみると、表V-13のように近隣の人の比率は非関係者の方がわずかに上回っている。他方、西陣織関係者では同業者をあげている者がきわだって多くなっている。そして同業者の場合もその居住地のほとんどが

表V-11 お中元お歳暮のやりとりしている人数(近所)

|         | 1～2  | 3～5 | 6人以上 | NA  | 贈答有計 | N   |
|---------|------|-----|------|-----|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 12.7 | 7.1 | 0.4  | 0.4 | 20.8 | 448 |
| 非西陣織関係者 | 9.6  | 4.5 | 1.9  | 1.0 | 16.9 | 314 |

表V-12 頼りになった人に近所の人をあげた比率

|         | 進学・就職・結婚問題 | 病気・事故・失業 | 金銭上の問題 |
|---------|------------|----------|--------|
| 西陣織の関係者 | 18.3       | 26.3     | 5.8    |
| 非西陣織関係者 | 16.4       | 21.2     | 6.5    |

表V-13 親交関係

|         | 親類   | 同窓   | 近隣   | 同僚  | 同業   | その他  | N   |
|---------|------|------|------|-----|------|------|-----|
| 西陣織の関係者 | 19.2 | 10.1 | 37.5 | 5.8 | 20.4 | 7.1  | 448 |
| 非西陣織関係者 | 22.6 | 8.3  | 39.8 | 9.9 | 6.9  | 12.6 | 314 |

学区内であってみれば、柏野学区では近隣関係と西陣織の経済的關係が分かちがたく重なりながら親交関係が結ばれているということになる。こうした西陣織関係者の親密な近隣交際のあり方が柏野における近隣交際の多数派を形成しているとすれば、それは当然、地域の近隣交際の規範として非関係者のそれをも規定する。その結果、西陣織との関係の有無が近隣交際にあまり大きな差をもたらしきことは十分に考えられるであろう。

次に、従業上の地位と近隣交際との関係をみてみよう。一般には、柏野の西陣織関係者の大半を占める零細事業主および家族従業者（賃機層）は、その生活形態の同質性、地域への拘束性の高きなどが地域的な親交関係を形成させ易くするとともに、もう一方で、出来高制による時間的束縛の強さが近隣交際にネガティブに作用すると想定さる。これに対して雇用労働者の場合には地域での生活時間が短く、地域への拘束性も弱いため地縁性は希薄であると考えられる。表V-14-1と表V-14-2は従業上の地位別にみた近隣交際の4つ形態であるが、事業主の近隣交際は多忙さなどのネガティブな要因にもかかわらず、雇用者に比べると全般的に少し広く交際が行われているようである。例えば、①挨拶の軒数で21軒以上の比率は雇用者を10ポイント以上も上回り、また②留守中のことを頼む、③お茶に呼んだりする、④お金を用立てたりする、のいずれにおいても3軒以上の比率では雇

用者よりも高くなっている。

この事業主のなかには地元商店主なども含まれており、その点で西陣織との関係性でみた場合よりは近隣交際が少し高めに出ているように思われる。とはいえ、近隣者への認知度のメルクマールともいえる①挨拶する軒数で、地元拘束型の事業主がかなり多くなっているのを除けば、雇用者との近隣交際の差異はそれほど大きなものとはいえない。

以上、西陣織との関係性および従業上の地位の2つの経済的属性との関連で柏野学区の近隣交際の様相をみてきた。西陣織関係者、事業主などで多少、近隣交際の比率が高くなっている程度で、経済的な地位の差はここでは近隣交際のあり方にそれほど大きな差異をもたらしていないことがわかった。同一地域内における経済的地位の違いが近隣交際のあり方に大きな差異をもたらしていないのは、経済的な属性が近隣交際に影響していないのではなく、地域内で特定の階層のウェイトがきわめて大きな場合には、その層の近隣交際のあり方が地域の標準とされ、階層差が顕在化しないのではないかと思われる。

## (2) 居住空間の形態差の影響

柏野学区の親密な近隣交際とその狭隘な居住空間との間に、一定の規定関係が存在するのではないかという、いわゆるプライバシー仮説については既に述べた。それを厳密に検証するには、学区内を住宅条件等によっていくつかの

表V-14-1 従業上の地位別近隣交際の形態 (1)

|       | ① 道で挨拶する軒数 |      |       |       |       | ②留守中のことを頼む軒数 |      |      |       | N   |
|-------|------------|------|-------|-------|-------|--------------|------|------|-------|-----|
|       | 1～5        | 6～10 | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計 | 1～2          | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 事業主   | 4.0        | 19.1 | 15.4  | 46.5  | 86.0  | 40.0         | 21.1 | 2.0  | 64.2  | 299 |
| 家族従業者 | 16.3       | 18.5 | 14.1  | 37.0  | 87.0  | 41.3         | 19.6 | 2.2  | 63.0  | 92  |
| 雇用者   | 9.8        | 22.3 | 18.3  | 33.9  | 84.4  | 44.6         | 18.0 | 2.4  | 65.1  | 327 |

表V-14-2 従業上の地位別近隣交際の形態 (2)

|       | ③お茶に呼んだりする軒数 |      |      |       | ④お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|-------|--------------|------|------|-------|---------------|-----|------|-------|-----|
|       | 1～2          | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 | 1～2           | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 事業主   | 18.2         | 23.1 | 8.0  | 50.5  | 6.7           | 3.0 | 0.7  | 11.0  | 299 |
| 家族従業者 | 22.8         | 16.3 | 7.6  | 46.7  | 8.7           |     |      | 8.7   | 92  |
| 雇用者   | 21.1         | 21.4 | 4.3  | 46.8  | 7.3           | 0.3 | 0.9  | 8.6   | 327 |



表V-15-1 住宅所有形態別近隣交際 (1)

|     | ① 道で挨拶する軒数 |      |       |       |       | ②留守中のことを頼む軒数 |      |      |       | N   |
|-----|------------|------|-------|-------|-------|--------------|------|------|-------|-----|
|     | 1～5        | 6～10 | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計 | 1～2          | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 持家  | 7.4        | 22.7 | 14.9  | 39.8  | 85.4  | 41.1         | 21.5 | 2.7  | 66.0  | 591 |
| 借家  | 7.3        | 17.2 | 15.5  | 42.5  | 86.7  | 45.1         | 17.6 | 2.1  | 64.8  | 233 |
| その他 | 29.1       | 15.9 | 20.3  | 17.4  | 82.6  | 46.4         | 2.9  |      | 49.3  | 69  |

表V-15-2 住宅所有形態別近隣交際 (2)

|     | ③お茶に呼んだりする軒数 |      |      |       | ④お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|-----|--------------|------|------|-------|---------------|-----|------|-------|-----|
|     | 1～2          | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 | 1～2           | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 持家  | 19.8         | 22.2 | 6.8  | 49.2  | 7.3           | 1.2 | 0.8  | 10.0  | 591 |
| 借家  | 18.9         | 18.9 | 5.2  | 42.9  | 6.9           | 1.3 | 1.3  | 9.4   | 233 |
| その他 | 23.2         | 5.8  | 2.9  | 31.9  | 8.7           |     | 1.4  | 10.1  | 69  |

\* その他は賃貸マンション・アパート、社宅・公務員住宅、間借・下宿、その他を含む。

居住空間の異なる住区に区分し、その間の比較をする必要がある。しかし、ここでは住宅の所有形態、住宅の広さなどを居住空間の簡便な指標として用い、それによって比較することにする。

柏野学区では持家層と民間借家層との間に居住条件や居住期間などであまり大きな差はみられない。持家層の多くは戦後になってそれまで居住していた借家を購入して持家化したとされている。したがって、このように居住条件等にあまり差がないことの反映か、持家層と借家層との間に近隣交際の差異もほとんど現れていない。ただ、お茶に呼ぶ、呼ばれるといった相互訪問型交際は住宅事情が影響するのか、持家層の方が若干高くなっている。これに対して、住宅所有形態「その他」層は上記2層とはかなり異なっており、近隣交際がかなり抑制的となっている。それは「その他」居住層が、柏野学区では特異な住民層であることを示している。つまり、この住宅所有形態は、その居住の過渡的性格を表わしているからである。だから「その他」住民の多くは非定着型の若年層で、かつ西陣織との関係がきわめて薄い住民層であると考えられる。

この「その他」層の特徴は親交関係者の属性にも現れている。持家層と借家層の場合、親交者の関係は近隣・同業者の比率がそれぞれ53.9%、56.1%と過半数を越えているのに、

「その他」層のその比率は3割強と低くなっている。その一方で、親交者に同僚をあげる者の比率は、持家および借家層より10ポイント以上も高くなっている。

次に、住宅の規模と近隣交際との関係をみてみよう。一般に、住宅規模の大きさは近隣交際との関係でどのような意味をもっているであろうか。住宅規模の狭小さが移動理由のなかで小さくない位置を占めているとすれば、規模の大きさと定住性の間には、一定の関連性があるとみてよいだろう。したがって、規模が大きくなるにしたがって、地域住民への認知度と最低のつきあいを示す、「道で挨拶する」軒数が多くなるのはある意味で当然であろう。すなわち、「道で挨拶する」軒数が21軒以上の比率は、住宅規模の大きい世帯でかなり高くなっている。

また、住宅規模の大きさは相互に訪問しあって交流することに一定有利な条件ともなるであろう。③の「お茶に呼んだりする」軒数の多い者の割合が住宅規模の大きい世帯で相対的に高くなっているのは、そのことを物語っていると思われる。しかし、留守を頼んだり、またお金を用立てたりする近隣交際においては、住宅規模の間ではっきりした傾向性が認められない。

さて、プライヴェーシー仮説との関係で、これらの結果をどのように理解したらよいであろうか。持家と住宅規模を物差しにしてみた近隣交際では、相互訪問型のつきあいにおいて持家層

表V-16-1 住宅規模別近隣交際の形態 (1)

|        | ① 道で挨拶する軒数 |       |       |       | ② 留守を頼みあう軒数 |      |      |       | N   |
|--------|------------|-------|-------|-------|-------------|------|------|-------|-----|
|        | 1～10       | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計 | 1～2         | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 1～10畳  | 36.1       | 16.4  | 27.9  | 80.3  | 37.7        | 14.8 | 3.3  | 55.7  | 61  |
| 11～20畳 | 32.0       | 18.3  | 37.1  | 87.4  | 43.7        | 18.5 | 1.8  | 64.4  | 334 |
| 21～30畳 | 28.3       | 17.4  | 39.6  | 86.0  | 45.7        | 21.2 | 2.4  | 70.0  | 293 |
| 31畳以上  | 26.7       | 13.0  | 43.5  | 84.5  | 37.9        | 19.9 | 2.5  | 60.9  | 161 |

表V-16-2 住宅規模別近隣交際の形態 (2)

|        | ③ お茶に呼んだりする軒数 |      |      |       | ④ お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|--------|---------------|------|------|-------|----------------|-----|------|-------|-----|
|        | 1～2           | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 | 1～2            | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 1～10畳  | 9.8           | 18.0 | 4.9  | 32.8  | 13.1           | —   | —    | 13.1  | 61  |
| 11～20畳 | 21.6          | 18.3 | 3.3  | 43.1  | 7.2            | 1.2 | 1.2  | 9.9   | 334 |
| 21～30畳 | 24.6          | 18.4 | 7.5  | 51.2  | 5.8            | 1.7 | 0.6  | 9.2   | 293 |
| 31畳以上  | 14.3          | 26.7 | 9.3  | 50.9  | 8.7            | 0.6 | 1.2  | 11.2  | 161 |

や住宅規模の大きな世帯の比率が若干高くなっているが、借家層や規模の小さい住宅居住者層でとりたてて親密な近隣交際が行われているとはいえない。

これは次のように考えられないであろうか。従来、狭小住宅が構造的にも開放的であった時代には、狭小住宅＝プライバシーの開放性を意味していた。しかも、小さな子供が地域社会のなかにあふれているなかでは、このプライバシーの壁はいとも簡単に突破されることになったであろう。したがって、個々の住宅の居住条件の劣悪さはそのまま地域居住空間の低位性につながっていた。加えて、住宅条件の低位性は貧困をも表示しており、相互扶助的近隣交際を必然化することにもなったであろう。プライバシーの侵害は物理的にも、社会的にも防ぎようがなく、プライバシー仮説がいうように、親密な関係の形成は不可避であった。

ところが、現在は、狭小住宅が密集している地域であろうと、個々の世帯の住宅条件の低位性がそのままプライバシーの侵害とイコールではなくなっている。住宅構造的にも、社会的にも狭小住宅がそのまま開放的であるとは言えないのである。とりわけ、狭小住宅に青年層や高齢者層の居住が多い場合には、住宅条件の低位性が近隣交際の疎遠さにつながることも考えられる。

ではプライバシー仮説という地域居住環境の低位性と近隣交際との間には、今日どのような関連性があると想定できるだろうか。生活空間が地域レベルでみて閉鎖的である場合には、その内部における住民の相互認知や接触頻度が相対的に高くなることが予測される。さらに、柏野学区のように住民の大半が西陣織の関係者である場合には、当然、生活行動や生活時間に共通性が強まり、相互認知や接触頻度も一層高くなり、親密な関係に発展する可能性も高まるであろう。

このように柏野学区の閉鎖的な居住空間は、プライバシー侵害という回路を通して近隣交際の親密さと結びつくのではなく、相互認知や接触頻度の高まりと、生活条件の共通性を介して親密な関係性をうみだしているのではないと思われる。

### (3) 地域生活史と近隣交際

その地域社会のなかで個人や家族がどのような生活を積み重ねてきたか、また今後そのなかでどのような生活を営もうとしているかは近隣交際のあり方に大きな影響を与えるにちがいない。個人や家族の地域社会とのかかわりの集積を地域生活史と呼ぶとすれば、それは居住期間、地域移動歴、地域生活環境問題への対応、地域団体の役職歴などの諸指標になんらかの形で現れることになる。ここではそれらの諸指標

のうち居住期間に地域生活史を代表させて、近隣交際との関連性をみることにする。

居住期間は地域生活史に関する量的な指標であり、それによって地域生活に刻みこんだ内容・質的側面をみることはできない。しかし、地域社会での生活期間の長短は地域生活の内容や質に一定の影響をもたらす。住民の移動率がきわだって高い場合は別にして、相互認知や接触度は、長期居住者ほど大になるであろう。柏野学区のように賃機業者の比重が圧倒的に大きく、その意味で生活様式の均一性が高い地域では、相互認知や接触度はさらに一段と高くなると推定される。

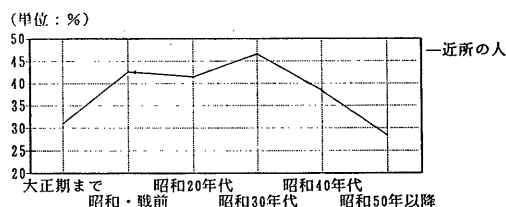
また柏野学区のように西陣地域のなかでも開発の時期（昭和・戦前）が比較的新しく、かつ上下関係の経済的基礎があまり強固でない地域社会においては、町内会その他のフォーマルな近隣関係の運営が特定の人々に独占されるということは少なく、居住期間が長くなって相互認知や接触度が高くなれば、フォーマルな近隣関係へのかかわり方も濃くなる。

例えば、町内会への参加度で消極的な層（「たまに参加」、「会費を払うだけ」、「無関心なので町内会の有無を知らない」の合計）の比率は、大正期まで31%、昭和（戦前）37%、昭和20年代43%、昭和30年代35%、昭和40年代46%、昭和50年代以降62%となっており、昭和30年代で低下しているものの、ほぼ居住期間の短い住民層ほど消極的な者が多くなっている。

とはいえ、同一地域社会に長期居住することによって高まる相互認知や接触度は、ほぼ10年間でプラトウ化するものと思われる。そのため10年くらいたつと“よそ者”ではないとみなされ、フォーマルな近隣関係のレベルではほとんど差がみられなくなる。地域団体の性格によって多少開放性の差はあるものの、居住年数が10年以上経過すると加入率や役職経験率は急速にプラトウ化する傾向をみせている。町内会のような比較的オープンな団体では、10年以降の加入率、役職経験率に差異がなくなっており、防犯・消防団や氏子会で20年～30年となっている。

このように居住期間の長期化はフォーマルな

図V-2 居住開始時期別親交者



近隣関係を進展させる傾向性をもっているが、そのことがそのまま個人的なレベルでの私的交際の親交度を表示するものではない。図V-2のように、親しい人として近所の人をあげる者の比率は、昭和30年代（居住期間20～30年）までは増大するが、その後は減少している。このことをどのように理解すればよいだろうか。居住期間20～30年以上となると、この地域を生涯の地と決めた人や、また2代目の住民も多くなってくるであろう。それらの人々にとってフォーマルな近隣関係は欠かせないにしても、私的な近隣交際の深まりは必ずしもプラスの作用だけではない。親密な交際の場合にはトラブルもまた深刻化する。そのため近隣関係を長期的に安定化させようとする、相互に深くかかわらない平穏なつきあいの方が選択されることになる。

住民の1人がわれわれの調査票に「京のきだおれ」という言葉を知っていますか。「きだおれ」は普通は“着倒れ”と解釈されていますが、実は“気倒れ”なのです。隣近所の迷惑にならないように、隣近所とトラブルを起こさないように、という絶えざる気配りで、気疲れして、“気倒れ”するのです」と書いていたが、こうであるとすれば、長期居住者は近所の人との個人レベルでの親しい交際を多少抑制したり、また交際する人を選別するということになると思われる。居住期間が30年以上にわたる定着型の住民層において、かえって親交者に近所の人をあげる者の比率が低下するのは、このような事情によるものであろう。

次に、居住期間と近隣交際の内容との関係について、もう少したらいって検討することにする。①の道で挨拶するという近隣交際の比率は居住時期の新しい者、つまり居住期間の短い者ほど高くなっている。また居住期間の長い者ほど多数の者と挨拶をかわす関係になっているこ

表V-17-1 居住開始時期別近隣交際の形態 (1)

|        | ① 道で挨拶する軒数 |       |       |       | ② 留守を頼みあう軒数 |      |      |       | N   |
|--------|------------|-------|-------|-------|-------------|------|------|-------|-----|
|        | 1～10       | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計 | 1～2         | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 大正期まで  | 23.8       | 12.4  | 43.8  | 80.0  | 36.2        | 20.0 | 4.8  | 61.0  | 105 |
| 昭和・戦前  | 27.5       | 14.0  | 40.9  | 82.5  | 40.1        | 20.5 | 2.6  | 63.2  | 342 |
| 昭和20年代 | 30.0       | 18.3  | 35.0  | 83.3  | 47.2        | 15.0 | 2.2  | 64.4  | 180 |
| 昭和30年代 | 22.9       | 14.5  | 48.2  | 85.5  | 41.0        | 22.9 | 2.4  | 66.3  | 83  |
| 昭和40年代 | 32.2       | 22.2  | 30.0  | 84.4  | 46.7        | 14.4 | 1.1  | 62.2  | 90  |
| 昭和50年後 | 39.8       | 21.4  | 28.6  | 89.8  | 42.9        | 17.3 | 1.0  | 61.2  | 98  |

表V-17-2 居住開始時期別近隣交際の形態 (2)

|        | ③ お茶に呼んだりする軒数 |      |      |       | ④ お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|--------|---------------|------|------|-------|----------------|-----|------|-------|-----|
|        | 1～2           | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 | 1～2            | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 大正期まで  | 19.0          | 23.8 | 7.6  | 50.5  | 6.7            | 1.0 | 1.0  | 8.6   | 105 |
| 昭和・戦前  | 15.2          | 15.5 | 4.7  | 35.4  | 4.7            | 0.6 | 1.2  | 6.4   | 342 |
| 昭和20年代 | 19.4          | 24.4 | 5.0  | 48.9  | 8.3            | 1.1 | 0.6  | 10.0  | 180 |
| 昭和30年代 | 19.3          | 21.7 | 8.4  | 49.4  | 8.4            | 3.6 | 1.2  | 13.3  | 83  |
| 昭和40年代 | 23.3          | 25.6 | 10.0 | 58.9  | 6.7            | 1.1 | —    | 7.8   | 90  |
| 昭和50年後 | 29.6          | 17.3 | 3.1  | 50.0  | 14.3           | 1.0 | 2.0  | 17.3  | 98  |

とがわかる。これに対して、②の留守を頼みあう関係は昭和30年代および昭和20年代で交際比率が若干あがっているが、全体としては時期別の差があまり大きくない。それはこの場合でもご近所に一声かけることによって、不在時の防犯や荷物を預かる程度の役目が期待されており、家のなかに入って留守番をすることまでは期待されていないからである。

相互訪問型の③お茶に呼ぶ交際形態についても、居住期間による特徴はあまり明確に現れていない。昭和40年代層（来住10～20年の人）で交際比率が高く、昭和・戦前層（来住40～60年）で低くなっている。前者の交際率の高さはその層のライフステージと関係があるように思われる。すなわち、年齢的には40歳代が多く、かつ家族形態では夫婦と未婚子の比率が最も高くなっている。とすると、子供を介して親密な関係が形成されているとも考えられる。

柏野学区の多数派であり、地域形成の中心を担ってきた昭和・戦前層は、相互訪問型の交際だけでなく、④の金銭援助をともなうようなつきあいについても交際比率が低くなっている。50歳代を中心とするこの層は西陣織関係者も多く、仕事の上では重要な位置におかれている。

したがって多忙な生活をよぎなくされている者も多いが、前出の事業主の近隣交際について分析したように、そのことが相互訪問型の私的な近隣交際について抑制的態度をとらせているとは必ずしもいえない。

考えられる要因としては、この昭和・戦前層の住宅事情の悪さの影響がある。すなわち、借家比率の高さや住宅規模の狭小などである。既にみてきたように住宅条件の低位性は訪問型の交際にマイナス的作用をもたらししており、そのことが、この層の相互訪問型の近隣交際を抑制させていることは十分ありうることと思われる。

地域生活史の1つの指標として居住開始時期（これは同時に居住期間でもある）を用いて、それが近隣交際にどのように影響するかをみてきた。それによると居住期間の長さは個々人の私的なレベルでの近隣交際に一様に影響するということはない。長期居住者に近隣での親交関係を抑制する傾向があること、居住期間が10年間を超えようになると、ライフステージや住宅条件など居住期間以外のファクターの影響が大きいこと、などが明らかになった。

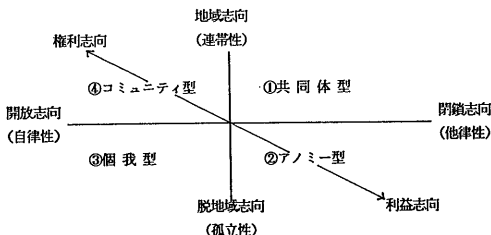
## 4. 地域生活意識と近隣関係

### (1) 「コミュニティ・モデル」と近隣関係

人びとがどのような地域生活をおくりたいと考えているか、これは現実には営まれているフォーマル、インフォーマルな近隣関係のあり方を大きく規定する。生活価値の次元での地域生活は、実際には、さまざまな現実の諸条件によって歪曲されたり、修正されたりしながら現実の地域生活として具体化することになる。またこの過程で望ましきものとしての地域生活価値それ自体も変化する。

ここでは望ましき地域生活のあり方を、その担い手の類型化を通して提示した奥田道大氏の「コミュニティ・モデル」によって把握し、その地域差をみることから始めてみよう。奥田氏の「コミュニティ・モデル」は図V-3のように住民意識を3つの座標軸で切りとって類型化している。これは個の自律と地域的連帯をイメージした近代市民像の類型化である。大都市郊外の新興住宅地域を想定した奥田氏の枠組みが、西陣地域のような伝統的な都市地域ではたしてどの程度有効性をもつか、若干の疑問がないわけではない。しかし伝統的都市として京都と共通した面をもつ金沢市の調査（国民生活モニター編『現代日本のコミュニティ』、川島書店、1975年）でも使用されて、一定の効果を発揮しており、われわれも同じモデルを用いることにした。

図V-3 住民意識を解く座標軸



①共同体型、②アノミー型、③個我型、④コミュニティ型の4つの住民モデルは、現に存在する住民の4つのタイプであるだけでなく、市民の主体形成のプロセスをも表示している。つまり、共同体型→アノミー型→個我型→コミュ

ニティ型である。この「コミュニティ・モデル」では、④コミュニティ型住民は望ましき住民像として想定されている。

そしてこの4つの住民モデルを表すために、次のような説明が用いられる。

- ①共同体型……………「この土地には土地なりの生活やしきたりがある以上、できるだけこれにしたがって、人びととの和を大切にしたい。」
- ②アノミー型……………「この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。地元の熱心な人たちが、地域をよくしてくれるだろう。」
- ③個我型……………「この土地に生活することになった以上、自分の生活上の不満や要求をできるだけ市政・その他に反映していくのは、市民としての権利である。」
- ④コミュニティ型…「地域社会は自分の生活上のひとつのよりどころであるから、住民がお互いにすすんで協力し、住みよくするように心がける。」

この説明文では④のコミュニティ型の表示に多少問題があるように思える。この文は地域志向（連帯性）は表わしていても、個の自律性や権利志向は十分に表現しえていない。地域性に引きずられた表現内容になっている。そのため調査では、④コミュニティ型の比率が高めに出てくる可能性がある。

次に、4つの住民モデルと近隣関係との関連性についてであるが、①と④が地域志向、②と③が脱地域志向であるから、一般には前者が密な近隣関係を形成し、後者は近隣とは疎遠な関係にあるという想定が成り立つ。しかし、人間

類型としては①と②は他律性，③と④は自律性という共通性を付与されている。したがって①と②，③と④の差異は地域や連帯への志向性であり，他律型の①および②の場合には地域の伝統的な規範の状況によっては，①↔②と相互に移行するであろう。また同じ地域志向の①と④が実際の近隣関係でどのような違いをみせるか注視してみよう。

## (2) 「コミュニティ・モデル」でみた“柏野的なもの”

まず，個人を対象にした第4次調査（13学区調査）によって住民意識における柏野学区の特徴をさぐってみる。表V-18によれば，①共同体型の比率が高いのは乾隆学区61.4%，西陣学区55.6%などである。これらは歴史的に西陣織を営んでいた伝統的地域であり，伝統的な共同体タイプの住民比率が高いのも首肯できる。同じ伝統的地域でも桃園学区や嘉楽学区のようにマンション化が進み新住民が多くなった地域では共同体型の比率は低くなっている。共同体型の解体モデルとしてのアノミー型は，桃園学区，紫野学区などで高くなっており，共同体型とは対照的である。

個我型は関心が地域に収斂しない要求型の市民と言い換えてもよい。だから何か大きな地域問題をかかえているような地域では，コミュニ

ティ型として現われる可能性がある。いずれにしても A. スミスが想定したように，この個我型こそが近代市民像の原型ともいえるのであるが，全体的に支持率は低い。まだ要求の実現を市民の権利として捉ええることはエゴイスティックな態度と受け止められているのかもしれない。

コミュニティ型の比率が最も高いのは，柏野学区，次いで嘉楽学区，出水学区などとなっている。職業構成，所得，学歴など属性的にあまり共通点がない，これらの地域でコミュニティ型が多いのは何故であろうか。

もともと「コミュニティ・モデル」ではコミュニティ型は大都市の郊外に住むホワイトカラー層が，また共同体型は自営業者層がモデルとして想定されていた。しかし市民の概念が原理的に小商品生産者をモデルにしているように，社会関係が近代化された地域社会においては，コミュニティ型は賃労働者層以上に商工自営業者層に受け入れられるモデルとなる。このように考えれば自営業者の多い柏野学区でコミュニティ型の比率が高いことも一応説明がつく。つまり，嘉楽学区や出水学区のコミュニティ型の比率の高さがホワイトカラーや賃労働者層のそれであるとすれば，柏野学区のコミュニティ型は自営業者層のそれであるという理解である。

次に，同じ調査項目による世帯主調査で柏野学区と西陣学区との比較をみてみよう。前出の個人調査の場合と多少異なっている。柏野学区については④コミュニティ型が減少して，②アノミー型が若干上昇している。西陣学区では①共同体型が大幅に低下して，②アノミー型が大きく増大している。その結果，個人調査で顕著にみられたような，柏野学区にはコミュニティ型が多く，西陣学区は共同体型が多いという両学区の特徴が明瞭には現れていない。またアノミー型の上昇は世帯主の方で地域生活からの疎

表V-18 学区別「コミュニティ・モデル」  
(調査対象：個人)

|    | ①共同体型   | ②アノミー型  | ③個我型    | ④コミュニティ型  |
|----|---------|---------|---------|-----------|
| 柏野 | 39.2    | 8.1     | 4.1     | 48.6(1) * |
| 紫野 | 42.4    | 13.9(2) | 4.2     | 39.6      |
| 成逸 | 46.9(4) | 10.2(4) | 6.1     | 36.7      |
| 西陣 | 55.6(2) | 2.2     | 2.2     | 40.0      |
| 乾隆 | 61.4(1) | 1.8     | 7.0     | 29.8      |
| 翫鷺 | 47.2(3) | 4.6     | 7.4(4)  | 40.7      |
| 唐楽 | 40.0    | 10.0    | 2.5     | 47.5(2) * |
| 桃園 | 36.7    | 18.4(1) | 2.0     | 42.9      |
| 正親 | 41.4    | 6.9     | 8.6(3)  | 43.1(4) * |
| 聚楽 | 44.2    | 11.6(3) | 9.3(2)  | 34.9      |
| 仁和 | 44.4    | 9.0     | 7.3     | 39.3      |
| 出水 | 42.9    | 6.3     | 6.3     | 44.4(3) * |
| 待賢 | 39.3    | 6.6     | 13.1(1) | 41.0 *    |

※ ( )の数字は順位。

\*印は③と④の合計が50%を超えている学区

表V-19 学区別「コミュニティ・モデル」  
(調査対象：世帯主)

|    | ①共同体型 | ②アノミー型 | ③個我型 | ④コミュニティ型 |
|----|-------|--------|------|----------|
| 柏野 | 40.9  | 10.9   | 4.4  | 43.8     |
| 西陣 | 44.2  | 12.7   | 3.7  | 39.4     |

外が進行していることを暗示している。とはいえ、世帯主でみても柏野学区にコミュニティ型が多いという特徴がなくなっているわけではない。(表V-19)

ところで賃機業者の比率が高く、どちらかといえば下層自営業者層の町ともいえる柏野学区が何故コミュニティ型を示すのであろうか。一つは柏野学区の地域社会形成が西陣地域のなかでは比較的新しいということと関係しているように思える。大正期までに既に現在の学区に住んでいた者の比率は、柏野学区が11.4%であるのに対して、西陣学区では24.3%と2倍以上になっている。したがって柏野学区における土地の“しきたり”の規制力は、西陣学区などに比べればはるかに弱いであろう。

二つには先に述べたように、賃機層の多さに示される社会層の等質性が関係していると思う。この階層は経済的には脆弱であるが、形式的には一応独立自営であり、そのため地域内での社会関係は比較的对等平等なものとなる。加えて、地域の生活環境条件の低位性が、地域社会への関心を絶えず喚起することになれば、あるべき地域社会の担い手像としては「住民がお互いにすすんで協力し、住みよくするように心がける」ということになるであろう。

もちろん現実の地域生活がこの通りにいっているわけではない。例えば、生活環境問題への解決方法を西陣学区と比べれば、地元有力者に頼むの比率がかなり高くなっているなど、コミュニティ型の多い柏野学区にはそぐわない傾向も一部にはある。また脱地域志向という位置づけを与えられている個我型住民が地域活動に熱心にかかわっているという意外なデータもある。しかし、全体としてコミュニティ型や個我型といった自律性の強い住民層が柏野学区の地域活動を支えている点は大きな特徴といえるであろう。町内会活動に積極的に参加している中心メンバー、会合ごとに参加している者の割合は、個我型約4割、コミュニティ型約34%で、伝統的な共同体型より高くなっている。学区社会福祉協議会の活動が活発に行われているのも、地域社会の担い手の側のこうした特徴と関係していると思われる。(表V-20)

表V-20 「コミュニティ・モデル」と町内会参加度

|             | 積極的<br>参加<br>中心<br>役割 | 会合<br>ごと<br>に参<br>加 | よく<br>参加 | たまた<br>ま参加<br>程度 | 会費<br>のみ | 町内会<br>に関心<br>なし |
|-------------|-----------------------|---------------------|----------|------------------|----------|------------------|
| 共同体型        | 3.2                   | 25.7                | 26.2     | 24.8             | 13.7     | 2.3              |
| アノミー<br>型   | 4.0                   | 6.6                 | 15.4     | 26.4             | 30.8     | 11.0             |
| 個我型         | 15.8                  | 23.7                | 15.8     | 18.4             | 18.4     | 2.6              |
| コミュニ<br>ティ型 | 8.5                   | 25.1                | 26.4     | 17.7             | 14.4     | 3.0              |

### (3) 地域生活意識と近隣関係

ここでは地域生活意識のうち「コミュニティ・モデル」という形で把握された地域生活への規範意識と定着意識の2つをとりあげ、それらと近隣交際との関連性を分析することにする。まず「コミュニティ・モデル」別の近隣志向の程度をみるために、親交関係の属性から検討をはじめめる。表21によると、親しい人を地域のなかに作っている割合が高いのは、個我型の約47%と共同体型の40%であり、アノミー型とコミュニティ型ではその比率は35%強と若干低くなっている。他方、アノミー型では同窓、コミュニティ型では職縁(同僚・同業)の割合が高くなっている。

表V-21 「コミュニティ・モデル」別親交関係

|             | 近隣   | 親類   | 同窓   | 同僚  | 同業  | その他  |
|-------------|------|------|------|-----|-----|------|
| 共同体型        | 40.2 | 33.9 | 5.4  | 3.5 | 9.8 | 7.3  |
| アノミー<br>型   | 35.7 | 32.1 | 15.5 | 4.8 | 6.0 | 6.0  |
| 個我型         | 48.6 | 25.7 | 2.9  | 5.7 | 5.7 | 11.4 |
| コミュニ<br>ティ型 | 35.6 | 33.9 | 8.0  | 7.5 | 9.5 | 5.5  |

このように地域志向性の強い類型とされるコミュニティ型が、地域社会のなかでの個人レベルの親交関係比率があまり高くなく、反対に脱地域の類型とされている個我型が近隣での親交関係比率が高いといった、奥田氏の「コミュニティ・モデル」の枠組そのものに疑問を投げかけるような結果もでている。しかし、それは個我型とコミュニティ型の地域志向の違いが実際には相対的なものでしかないことを示しているのである。前にもふれたように、コミュニティ型の説明文では自律性、権利性の表現が弱く、そのため地域へのこだわりの強い人でも自律性

表V-22-1 「コミュニティ・モデル」別近隣交際の形態 (1)

|        | ① 道で挨拶する軒数 |       |       |        | ② 留守を頼みあう軒数 |      |      |        | N   |
|--------|------------|-------|-------|--------|-------------|------|------|--------|-----|
|        | 1～10       | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計  | 1～2         | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計  |     |
| 共同体    | 30.9       | 16.3  | 38.5  | 86.9   | 44.0        | 18.4 | 1.5  | 65.0   | 343 |
| アノミー   | 35.2       | 19.8  | 31.9  | 86.8   | 41.8        | 13.2 | 2.2  | <57.1> | 91  |
| 個我     | 39.5       | 13.2  | 18.4  | <71.1> | 50.0        | 15.8 | 2.6  | 68.4   | 38  |
| コミュニティ | 26.2       | 16.9  | 43.9  | 87.5   | 42.0        | 22.6 | 3.0  | 67.8   | 367 |

表V-22-2 「コミュニティ・モデル」別近隣交際の形態 (2)

|        | ③ お茶に呼んだりする軒数 |      |       |        | ④ お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|--------|---------------|------|-------|--------|----------------|-----|------|-------|-----|
|        | 1～2           | 3～5  | 21軒以上 | 交際あり計  | 1～2            | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| 共同体    | 20.1          | 20.4 | 4.7   | 45.8   | 4.7            | 0.3 | 0.3  | <6.1> | 343 |
| アノミー   | 15.4          | 15.4 | 5.5   | <36.3> | 9.9            | 1.1 | 4.4  | 15.4  | 91  |
| 個我     | 18.4          | 21.1 | 7.9   | 47.4   | 2.6            | 2.6 | 2.6  | 7.9   | 38  |
| コミュニティ | 21.8          | 22.1 | 6.8   | 51.5   | 9.5            | 1.9 | 0.5  | 12.8  | 367 |

や能動性を重視する場合にはコミュニティ型を選択せずに、個我型を選択してしまうことになると思われる。

町内会の参加度にも現れていたように、柏野学区においては個我型の住民がフォーマルな近隣関係だけではなく、個人レベルのつきあいにおいても強い地域志向を示している。この層こそは「コミュニティ・モデル」が本来的に想定している真のコミュニティ型であろうと思われる。柏野学区の熱心な近隣関係はこのような地域意識をもつ人々によって支えられているのである。

次に、「コミュニティ・モデル」の各タイプと近隣交際の内容の関係分析に移ることにする。表V-22-1及び表V-22-2によると、4つのタイプのうち最も親密な近隣交際をむすんでいるのはコミュニティ型である。どの交際形態においても交際率が高いだけでなく、交際軒数も多く、地域志向の高さを如実に物語っている。次いで個我型の交際率が高くなっている。伝統的な地域志向の共同体型において近隣交際率は必ずしも高くない。コミュニティ型や個我型と同じか、または若干低い程度である。アノミー型においては全般に近隣交際は低調であるが、金銭的な関係だけは4タイプのなかで最も高くなっている。

ここでの特徴はフォーマルな近隣関係、イン

表V-23 「コミュニティ・モデル」と定住意識

|        | ぜひ定住 | 定住   | 移住   | ぜひ移住 | D. K. |
|--------|------|------|------|------|-------|
| 共同体    | 16.3 | 52.2 | 15.2 | 3.2  | 11.7  |
| アノミー   | 6.6  | 23.1 | 31.9 | 20.9 | 17.6  |
| 個我     | 15.8 | 44.7 | 18.4 | 5.3  | 13.2  |
| コミュニティ | 17.2 | 53.7 | 14.7 | 2.5  | 10.4  |

フォーマルな近隣交際とも、自律的住民モデルであるコミュニティ型、個我型が高い参加比率、交際比率を示していることである。町内会への参加度、親交関係の属性、そして近隣交際の形態といった指標から判断すると、コミュニティ型と個我型との違いは、前者が個人レベルでのインフォーマルな近所づきあいを広く行っているのに対して、後者の場合はフォーマルな近隣関係に積極的であること、また個人レベルの交際において広くはないが極めて親密な関係をもっていることなどである。ここでは個我型は必ずしも脱地域志向ではない。表V-23のように、アノミー型の移動意識はかなり高くなっているが、個我型はコミュニティ型や共同体よりわずかに定住意識が低くなっている程度で、けっして脱地域志向とはいえない。

共同体型の近隣関係の低調さについては意外な感じもするが、今日の大都市においては、京都のような伝統的都市の、伝統産業の従事者が多い西陣のような地域においてさえ、人々の地



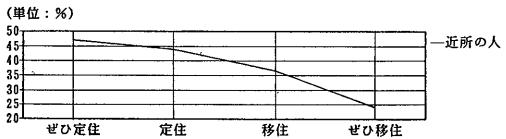
域生活を外側から規制する伝統的な地域生活規範が衰退していることをうかがわせる。その場合に、地域生活の維持と再生に大きな役割をはたしているのが、自律的なタイプとして位置づけられるコミュニティ型や個我型住民層になっているものと思われる。

最後に、定住意識と近隣交際の関係性についてふれておく。一定の地域社会に人々が住み続けたいと思う理由は何であろうか。柏野学区の場合には、第1が住み慣れているで約55%，次いで家や土地がある約33%，仕事の機会が多い約27%，買物の便利さ約26%などが主要な理由で、他の理由はそれほど高くない。反対に、移住希望者の理由は、住宅環境の悪さの約50%と騒音・交通事故の危険の約37%が2大理由となっている。このように慣れの問題を除けば、人々は住宅環境条件と生活の利便性を秤量にかけて、定住か否かの判断をしているようである。

一般には、定住意識は地域社会への肯定的な意識の反映とみなされ、したがって、定住意識の高い住民層の間には親密な近隣関係が存在すると想定されている。まずフォーマルな近隣関係との関連をみてみよう。町内会への参加度で、「積極的参加・中心的役割」と「会合ごと毎回参加」の比率は、ぜひ定住で30.3%，定住で33.5%とどちらも3割を超えているのに対して、移住希望は20.6%，ぜひ移住は9.6%と低

くなっている。また「ほとんど参加せず」+「無関心」の合計は、ぜひ定住層16.6%，定住層15.3%，移住層24.5%，ぜひ移住層57.2%となっており、定住意識が弱くなるにしたがって、参加度も低下している。このことから定住意識の高さと近隣関係の間には一定の相関関係があることがわかる。そのことは親交関係にも現れている。図V-4からもわかるように、親しい人に近隣の人をあげる比率は、定住意識の強い者ほど高くなっている。

図V-4 定住意識別の親交者比率（近隣）



ところが個人的な近隣交際の仕方においては、定住意識の強い層が親密なつきあいをしていとは一概にいえない。表V-24-1、表V-24-2にも示されているように、道で挨拶するや留守を頼みあうなどの交際形態では、交際比率では移住希望の比率が高いものの、軒数の多い層の割合では定住意識の強いものが多くなっている。交際の範囲の広さを示している。ところがお茶に呼ぶとか、お金を用立てるなどといった、比較的親密度の高い交際形態では、定住意

表V-24-1 定住意識別近隣交際の形態 (1)

|      | ① 道で挨拶する軒数 |       |       |       | ② 留守を頼みあう軒数 |      |      |       | N   |
|------|------------|-------|-------|-------|-------------|------|------|-------|-----|
|      | 1～10       | 11～20 | 21軒以上 | 交際あり計 | 1～2         | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| ぜひ定住 | 29.7       | 16.6  | 37.2  | 85.5  | 34.5        | 22.1 | 4.1  | 63.4  | 145 |
| 定住   | 27.2       | 15.3  | 42.2  | 85.2  | 43.1        | 19.1 | 2.7  | 65.4  | 445 |
| 移住   | 35.1       | 17.9  | 33.8  | 87.4  | 45.0        | 19.2 | 0.7  | 64.9  | 151 |
| ぜひ移住 | 31.0       | 33.3  | 26.2  | 90.5  | 57.1        | 9.5  | 2.4  | 69.1  | 42  |

表V-24-2 定住意識別近隣交際の形態 (2)

|      | ③お茶に呼んだりする軒数 |      |      |       | ④お金を用立てたりする軒数 |     |      |       | N   |
|------|--------------|------|------|-------|---------------|-----|------|-------|-----|
|      | 1～2          | 3～5  | 6軒以上 | 交際あり計 | 1～2           | 3～5 | 6軒以上 | 交際あり計 |     |
| ぜひ定住 | 17.2         | 21.4 | 6.9  | 47.6  | 3.4           | 1.4 | 0.7  | 8.3   | 145 |
| 定住   | 18.4         | 19.3 | 6.5  | 44.7  | 7.9           | 0.4 | 1.1  | 9.9   | 445 |
| 移住   | 25.2         | 17.9 | 4.6  | 47.7  | 8.6           | 2.0 | 0.7  | 11.3  | 151 |
| ぜひ移住 | 26.2         | 23.8 | 9.5  | 59.5  | 11.9          | 4.8 | 2.4  | 19.0  | 42  |

識の弱い住民の方がかえって交際比率も、交際軒数も多くなっている。

このように定住意識の強さはインフォーマルな近隣交際にあまり影響を与えていない。移住希望者の多くは住環境の低位性を主な理由にしているが、彼らの大半は移住の可能な比較的若い世代である。彼らは町内会のような在来型の地縁集団には積極的ではないが、PTAや趣味・同好会、同窓会などにはかなり熱心にかかわっている。この地域団体の加入状況から推察できるように、地縁という契機ではなく、子育てや趣味などを通して親しい人間関係を形成しているように見える。そして比較的若い世代ということもあってフォーマルな近隣関係でのかわりが希薄な分だけ、私的な近隣交際の占める位置がクローズ・アップしていることもあるだろう。

いずれにせよ、伝統的な地域集団を介してのフォーマルな近隣関係の形成が、インフォーマ

ルな近隣交際を促進させるとは必ずしもいえないということである。しかし、地域社会での生活を長期にわたって安定的に過ごすためには、フォーマルな近隣関係をしっかりと維持することが極めて大切になる。したがって長期居住者や定住意識の強い人々はフォーマルな近隣関係に対して積極的なかわり方をしている。そしてもちろんフォーマルな近隣関係がインフォーマルな近隣交際における親密化を推し進めることもあるであろう。

しかし、柏野学区のように移住希望者の大部分が住環境の悪さをあげているような地域では、地域社会で親密な近隣交際を行っていたとしても、移住を希望することは大いにありうることである。またインフォーマルな交際はさまざまなチャンネルを通して行われる。こうして移住志向と親しい近隣交際が併存するのである。

(浜岡政好)